

1937年度接近の火星観測報告 (4)

木 邊 成 啓 (在責)

第三章 観測の結果 (つづき) [伊達英太郎]

第3地區 ソリス湖附近 ($70^{\circ} \sim 120^{\circ}$)

この部分は火星表面で寂しい所で、ここから 190° 邊迄は10極程度には全く齒が立たぬと云つて良い位寂しい。が、20極以上の口徑を用ふ事によつて、ソリス湖附近の景色からシレウム邊の美しい景色と、其北方赤道附近に交はる所謂ロエル派の細いカナルが、氣流の收まつ時にのみ認められる。渡邊氏は花山のクック30極で、随分澤山の細いカナルを認められた。

ソリス湖は一名“火星の目玉”と稱される大體卵形をした青灰色の湖で、これのみは10極にも氣流狀態さへ良ければ認められる、相當濃い模様で、エリスレウム大海の西方に位し、ネクタ1運河によつて連結されてゐる。このソリス湖は今迄に種々形を變へ、或は橢圓形に、或は圓形に、或は勾玉形と變形し、本年は一寸瓢箪に似た形を呈し、今後の變形に期待する事が出来る。何分1935年、1937年の接近共にこのソリス湖は火星像の南縁に近く正確な形狀を見るには不適だつたが、今回の接近からは、火星の南極地方が見られる事になるからソリスはディスクの中央邊へ來て、その雄大な姿を充分に観測出来る様になるから、1939年8月の15年目の大接近が待たれる。

その南方のタウマシヤ地方は近年注意されてゐるが何分ソリス湖以上に南なので正しい地勢が判らない。

次に、ソリス湖を大日本帝國に例へると、恰度シベリア沿海洲に當る所のフィリキシ地方は、アントニヤヂ氏により2つの黒斑を發見されてゐるが、これも上述の理由で見られなかつた。

ソリス湖の北方、赤道上に、ソリス程濃くない筈のチソニウス湖があるが、これが今回は非常に濃くなり、ソリス湖と同様の濃さとなり眼を牽いた。ソリス、チソニウス共に、渡邊、前田兩氏により數個の黒斑の集合から出來てゐる事を確認されたのは、今回の接近での收得の1つであつた。

このソリス、チソニウス兩湖の分離は、アントニヤヂ氏以外には餘り知らな

い所から見て、兩氏の眼の鋭さには驚いてゐる。自分は只濃淡のある事丈けは判つたが分離迄出来なかつた。

北極近くへ飛んで、ポリウム地方は一帶に淡黒く見、此邊一帶に雲や霧の如きものの出現が頻繁だつた事は何を語るか？

尙、小さい湖として、チソニウスの左右北方にある、メラス湖は4人共確認し、西方のコロンバ泉はクック30種の威力と渡邊氏の鋭眼に見出されてゐる。其他ケラウニウス運河の南端にあるアスクラエウス湖は渡邊、前田氏共に観測され、自分は一度見てゐる。

運河——この地區で最も濃い太いカナルはオリラ灣とチソニウス湖をつなぐアガソデモン運河とエリスレウム海とソリスをつなぐネクタ1運河であつて、これは15種にも見られる濃いもので、渡邊、前田兩氏の鋭眼にはこれ又、斑點の連鎖に見られた。ポリウムからアスクラエウスへ通じてゐるのはケラウニウス運河で、これは淡いが太いもので4人共書いてゐる。

ニラス、ユリセス、タンタルス、フレゲトン、等の淡い細いカナルは渡邊氏によつて見られてゐる。

第4區 シレ1ヌム海、アマゾニス地方 (120°~180°)

第3區以上に望遠鏡裡には寂しい。ソリス湖を火星の眼玉とすれば、シレ1ヌム海は差當り火星の眉毛とでも云ふべきか。このシレ1ヌムのみ青緑色の強い黒色で、他に見えるのは、ユ1クジヌス、カストリウスの兩湖及プロポンチス I, II のブロックである。シレ1ヌム海は、ロ1エル派の描畫に見る如き美しい簡単な海ではなく、濃淡、斑點、突起入り交つた細長い海で、渡邊氏はクック屈折の威力で細かく觀察されてゐる。この海の西部はシムメリウム海に接してゐる。北半球前述の4個の黒斑は、先回の接近には非常に判然と見られ、前田氏は常に10cm で其形狀を捕へられたが、今回はこの方面一帯及北極の方へかけて黄色の霞の如きものの出現が頻繁で、4箇共判然と見られた事は少なかつた。

運河——渡邊氏はこの邊一帶に第3區と同様細い運河を見られたが他の3人には見られなかつた。著しい運河としては、シレ1ヌムとシムメリウムの中間より發して、クロニウム海へそゞろ奇麗にカ1ブしたシモイス運河、シレ1ヌム

海の中央部ゴルゴニウム灣から北方へ延びたゴルゴン運河、ユークジヌス湖より南東へ延びたピリフレゲソン運河等で、これ等は前田氏、小生共に認めてゐる。他に細いものはあるが、いづれも観測の難しいものである。

第5區 シムメリウム海、エリシウム附近 (180°~250°)

この部分で最も眼を牽くのは、火星像上部(南部)に東西に延びたシムメリウム海の青灰色で濃淡入り交つた豪壯な模様である。この南方クロニウム海(今回はディスク上に表はれてゐない)の間にあるエレクトリス、エリダニヤ兩大陸は、ディスクの南縁近くに帶青白色に輝き30°のアルガイヤ大陸と共にヘラス大陸以上に美しく光つてゐた。この兩大陸を區切つてゐるスカマンデル運河は誰の目にも明瞭。これに次いで目を牽くのは、有名なエリシウム地方の白い五角形だが、これは1935年度の接近には白い圓形になり10極にも見られたが、今回は形状が判然とせず非常に淡く、20極級にも確認出来なかつた。これは云ひかへればエリシウムを圍む、ユークノストス、ヒブレウス、カオス、スチックス等の運河が非常に淡かつたと云へる。エリシウム地方の東端に濃いトリビウム・チャロンチスは今回も相變らず濃く、これからプロボンチスIへのハデスIは先回の時には非常に太いものと思つてゐたが、今回口径が増した利益として、ハデスとフレグラとを明瞭に分離出来た。トリビウムからシムメリウム海へ走つてゐるケルベルスI, IIの中、Iの方は非常に太く濃く氣流状態の良い場合、圓い斑點の連鎖と云ふ事を渡邊、前田、兩氏及小生によつて確認された。ケルベルスIIの方はIに比し非常に淡く細く、氣流が悪い場合は見えない事もあつた。エリシウムの北方にあるスティンファリウス、シソニウス兩湖は明瞭に見られた。再び南半球に戻つてシムメリウム海とティレリヌム海との間のヘスペリヤ地方は特に渡邊、前田兩氏の銳眼によつて正しい形状を認められ、その中にあるヒリア湖を確認されたことは、1935年度から見て素晴らしい熟練振りである。勿論口径の増大が與つて力がある事は云ふ迄もない。又、ティレリヌム海も斑點の集合に分離出来た事も收獲の一つである。オウソニヤ大陸はエリダニヤ大陸に比し光輝は弱いが白く見られた。

運河——上述の太く又濃いカナル以外に、目を牽いたのは、シムメリウム海の西端から北へ長く延びた2本のカナルが有り、これはシーイングの良い場合、

15糧にも明瞭に見られた。即ち、シソニウス湖へ延びたエシオプス I, II 運河及アルシオニウス湖に達するパクトルス運河の2つである。

渡邊氏はこれ以外に數本の細いカナルを見られたが略す。(未完)

追記 火星圖は次回に記載の豫定。

シ リ ウ ス

伊 東 祐 大

太陽の遠くなつたのが君だといふ
太陽をながくみつめてゐると
鏡のやうに綠色に光りだすが
その時の色が少し君にも似てゐるが
それにしても遠くへいつたものだ
全天の恒星中
君が一番大きいから
こんな比較もするのだが

いつもオリオンの斜下で
大きく大きく澄んだ色
紺青色が桔梗色
露のかかつた草の葉の
色に大きく光る君
ともすればおぼこ娘のウインクを
おもはせるやうなまたたきもする
空の最大の巡禮者
僕は君を目八分に眺めながら
「君よ、わが永遠派の尤なるもの」
とつぶやきながら暗闇を歩くのだよ